

令和6年 3月29日



| | |
|-----|----------------|
| 担当課 | 文化振興課 |
| 担当者 | 稲垣、清水 |
| 電話 | (073) 435-1194 |
| 内線 | 3018 |

和歌山市指定文化財の新指定について

このことについて、和歌山市文化財保護審議会からの答申を受け、次のとおり5件の文化財資料が、和歌山市指定文化財として新たに指定されました（令和6年3月29日）。これにより、和歌山市指定文化財の件数としては、これまでの81件から5件増えて86件となります。

為光上人坐像、伝為光上人所持仏具に関しては令和6年度和歌山市立博物館特別展（令和6年10月5日～11月24日）でご覧いただくことができます。

| 名称 | 種類 | 員数 | 所在地 | 所有者 |
|---|-------|-------------------|----------|------|
| じぞうぼさつりゅうぞう 地蔵菩薩立像 | 彫刻 | 1 軀 | 和歌山市西庄 | 西念寺 |
| いこうしょうにんざぞう 為光上人坐像 | 彫刻 | 1 軀 | 和歌山市紀三井寺 | 護国院 |
| でんいこうしょうにんしよじぶつぐ 伝為光上人所持仏具 一 しゃくじょうとう 錫杖頭 一 ごこしよ 五鈷杵 一 ごこれい 五鈷鈴 | 工芸 | 1 柄 1 口 1 口 | 和歌山市紀三井寺 | 護国院 |
| きみいでらかんじんじょう 紀三井寺勸進状 一 こんごうほうじとうば 金剛寶寺塔婆 こんりゅうかんじんじょう 建立勸進状 一 こんごうほうじさいけん 金剛寶寺再建 かんじんじょう 勸進状 | 文書・書籍 | 1 巻 1 巻 | 和歌山市紀三井寺 | 護国院 |
| てんまんじんじゃ 天満神社 さんじゅうろくかせんへんがく 三十六歌仙扁額 | 絵画 | 1 8 面 | 和歌山市和歌浦西 | 天満神社 |

新指定1 ^{じぞうぼさつりゆうぞう} 地藏菩薩立像 1 軀

～ 葛城修験の二の宿ゆかりの仏様 ～

西念寺観音堂本尊脇侍の地藏菩薩立像は弓なりを描く眉と細く開いた眼、柔らかく結ばれた唇を配する穏やかな顔立ちで、浅く整えられた衣紋の表現は平安時代後期（12世紀）の特色をよく示しています。西念寺観音堂はかつて葛城修験の二ノ宿にあった神福寺から移されたもので、本像は江戸時代後期の地誌『紀伊続風土記』に「本尊十一面観音、脇士八幡大菩薩、大威徳明王なり。三像共に役行者の作」と記載された脇士八幡大菩薩に相当します。

和歌山・大阪の府県境にある第二経塚周辺一帯はかつて二ノ宿と呼ばれ、葛城修験と関係の深い寺院が立ち並んでいましたが、明治政府の修験道廃止政策により多くが廃絶しました。しかしながら、西念寺観音堂のように場所を変えて今日まで受け継がれた事例も少なくありません。令和3年度におこなった日本遺産葛城修験の構成文化財の調査の一環として実施した西念寺の文化財調査において確認された本像は葛城修験二ノ宿である神福寺のかつての姿を今に伝える貴重な遺品です。



新指定2 ^{いこうしょうにんざぞう} 為光上人坐像 1 軀

～ 紀三井寺の開山様 ～

かつて開山堂に伝わり、現在本堂後戸に安置される紀三井寺開山の為光上人坐像です。紀三井寺の縁起や霊験譚は室町時代の紀三井寺の再興の為の勸進の中で語られ、それに伴い開山為光上人に対する尊崇の念が高まる中で、文明4年（1472）の開山堂建立時に、造像されたと考えられます。

やや老相の厳しい顔立ちで、骨太で豊饒とした体躯を持ち、筆と巻子を執る姿は国土安寧・仏法興隆を願い自ら大般若経600巻を書写し、堂前に埋納したという縁起を基づくものと考えられ、室町時代の肖像彫刻として優れた水準の作行きを示しています。



新指定3 伝為光上人所持仏具

～ 龍女が授けた紀三井寺の宝物 ～

紀三井寺開山の為光上人が所持したと伝えられる仏具で、錫杖頭、五鈷杵、五鈷鈴より成り、このうち錫杖頭は為光上人が龍女から授けられた七種の宝物のうちの一つとされています。錫杖頭は青銅製で、正倉院宝物や日光男体山で出土した錫杖頭にも通じる古い様式をよく残しています。また、五鈷杵は修行者が煩惱を打ち砕くための道具である金剛杵の一つで、古



代インドの武器をモデルにしているともいわれています。金鍍金の良く残る金銅製の五鈷杵で、請来系の五鈷杵の系譜を強く引く全体的に重量感のある作風です。五鈷鈴は音によって内面を浄め、また合図にも用いる密教の法具です。青銅製の五鈷鈴で、鈴の部分に四天王などを浮き彫りにした仏像鈴です。このような鈴の部分に仏像があらわされた五鈷鈴は中国や朝鮮半島で作られたと考えられているだけでなく、魚々子を模倣した砂地のような地紋がみられることから中国からもたらされた可能性が高いと考えられます。

新指定4 紀三井寺勸進状

～ 「みんなでまもろう！紀三井寺」 室町時代のひとびとの祈り ～

勸進状とは、寺社の再建にあたり寺社の由緒や靈験などを美辞麗句で記した宣伝文で、勸進聖はそれを多くの人々の前で読み上げて、多くの寄附を募りました。

「金剛寶寺塔婆建立勸進状」は、紀三井寺の「住侶某」が現在の多宝塔を再建するために文安六年(1449)に作成した勸進状で、中世の紀



三井寺の歴史を知るうえで重要な情報となっています。また、「金剛寶寺再建勸進状」は、戦国期の荒廃した本堂を再興するために「小僧沙弥」が勸進に廻り、広く寄附を募るために大永二年(1522)に作成された勸進帳です。西国三十三所の札所寺院にはこれらと同様の料紙装飾が施された勸進帳と参詣曼荼羅がともに伝わっている事例が多いことから、南北朝時代～室町時代にかけて荒廃した札所寺院の再建に勸進勢力が大きな役割を果たしていたことを示す資料として重要です。

新指定5 ^{てんまんじんじやさんじゅうろくかせんへんがく} 天満神社三十六歌仙扁額 18面

～ 狩野派トップ絵師プロデュースによる三十六歌仙 ～

浅野幸長^{あきのよしなが}によって慶長11年(1606)に奉納された天満神社三十六歌仙扁額は、いわゆる、業兼様^{なりかねよう}の大型の三十六歌仙図扁額(各54.9×42.6)です。歌仙の整った目鼻立ち、頭部と胴体の比率、のびやかな描線^{びとうせん}や顔貌表現^{がんぼう}の細部の筆法など様式上の特徴も多くの点で、州信印^{くにのぶ}(狩野永徳所用印^{かのうえいとく})のある宗像大社本^{むなかたたいしゃぼん}(各44.5×26.5cm)に類似しています。残存する歌仙の端整な表情と赤外線写真からうかがえる画格の高さは、『関南天満宮伝記』(寛文4年[1664])が記すように「古右京」と呼ばれていた狩野光信を主催とする作画として大過なく、色紙形の文字も一様に三藐院様^{さんみやくいんよう}を示しており、諸資料が伝えるとおりに近衛信尹^{このえのぶただ}と考えられます。このように、損傷が進んでいるものの、奉納者・奉納年代、歌仙絵筆者を狩野派正系絵師と推測できる桃山時代～江戸時代初頭の歌仙絵扁額として稀少であり、絵画史的に重要な作品であると考えられます。

